

## 石の上にも三十年

彭 国 躍

神奈川大学言語研究センターは、前身の外国語研究センターを含めば、設立して三十三年経ちました。その間に大学、外国語学部の変革と共に、センターも教育設備や研究資料などにおいて不断に充実してきました。これはひとえに歴代の所長と関係教職員の方々のご尽力の賜物であります。2007年4月に所長に就任した私にとって、学生の勉学や教員の教育活動、研究活動をサポートする機関としてセンターをいかに発展させていくかが、大きな課題となっています。

言語研究センターをよりよくしていくために、ここでご利用の皆さんにご意見、ご要望、ご提案を求めたいと思います。

先生方や学生の皆さんが授業中または授業外の施設利用などを通して言語研究センターに期待すること、改善してほしいことについて、率直なお考えをお聞かせいただきたいと思います。センターはいつでも皆さんのご意見、ご要望に耳を傾け、日々改善の努力をしていきたいと考えています。

センターの研究グループ申請の受付は先日締め切らせていただきました。申請グループの中で継続が6件、新規が1件となっています。センターとしては皆さんの多様な研究活動をできる限り支援し、理論研究と実践研究、マジョリティー言語の研究とマイノリティー言語の研究、少人数グループ研究と大型研究プロジェクトなど、言語に関するあらゆる形態の学術研究をサポートしていき

たいと思っています。今後も多くの研究グループの立ち上げを引き続き呼びかけていきたいと思

最近、日本社会において大学に対する評価が厳しくなってきました。さまざまな機関による大学、学部、学科のランキングが公表されています。社会の評価に対して、われわれは常に敏感でなければなりません。

神奈川大学の外国語教育や言語研究のレベルは、関東圏だけではなく、日本においても誇りに思うものがあります。センター所員の中でさまざまな言語に渡って音韻論、文法論、意味論、語用論、社会言語学、応用言語学など多様な研究分野で活躍する専門家が勢揃いし、卒業した学生の多くも習得した外国語能力を駆使して国内外のさまざまな分野で活躍しています。そして、外国語学研究科を卒業した大学院生の中で大学教員に採用される者が着実に増えています。私はそこに神奈川大学外国語教育の明るい未来が見えたような気がします。

大学のブランド力は結局のところ人材力であります。人材の育成は長期的な戦略がなければ決して成し遂げることのできない仕事です。言語研究センターはこれまでの実績の上に立って今後も「石の上にも三十年」の精神で、教員の研究活動、優秀な学部生、大学院生の成長を末永くサポートしていきたく思います。